

その昔、別司から小坂（河和田町）へは、平和塔のあたりの小山を越えて行く道しかなかった。坂道の頂上におられたお地藏さんは、よく願いをかなえてくださるので、願かけする人が多かった。ある時、

「今夜はぜひとも博打に勝たせてください。」

と、お願いした男がいた。男は勝つにつれて欲が出て、おしまいには負けて丸裸。帰り道で腹を立てて、お地藏さんを窪地に投げ捨ててしまった。

何十年かたって、新しい村道ができたとき、清兵衛さんが自分の畑に北向きに安置した。願掛けして毎日お参りした人も多かったが、今はバイパス沿いに移されて、西向きに両手を合わせていらっしやる。

山を登りつめて、やれやれと一休みする峠には決まって二体三体と並んで、道中の安全を願って立っいらっしやる。上河内から服間にぬける清根坂の峠のお地藏さんは、待地藏という。河和田の谷と服間の谷とは縁結びが多かったので、里帰りした花嫁が無事もぐるように祈っておられるとか。

また水掛けの地藏さんが荒谷と三ツ又谷の分かれ道で道を教えていらっしやる。地元ではわかれの地藏さんとも呼んでいるが、平成十六年夏の豪雨禍の後、砂防工事が始まっていて、しばらく他所にお移りいただくかも。

こんこんと湧くしようずにはきまってお地藏さんがまつられている。

個人の願いでたてられたものも、数体ある。いつも一番身近にあって、我々に救いの手をさしのべ、日々の暮らしを支えてくださっているのだ。

⑤6 ムジナも化けた

人を化かすのはキツネやタヌキばかりではない。ムジナも隅に置けない存在だ。

まだ電気も汽車もなかったころ、小坂のやじべいさんの家の外でパンパンと合羽をはらう音がしび、しびらん、

「今帰ったぞ。」というやじべいさんの声^{こゑ}がした。

家の人^{いえひと}はてっきり主人^{しゅじん}が漆^{しつ}かきから帰^{かえ}ってきてくれたと思^{おも}い、あわてて表戸^{おもてと}を開^あけると誰^{だれ}もいない。

こんなことが二、三度^どあったので、今度^{こんど}こそだまされんぞと棒^{ぼう}切れを用意^{ようい}して待^まっていた。するとまた、

「おい、旅^{たび}から帰^{かえ}ったんじゃ。早^{はや}う開^あけんかい。」

と、戸^とをドンドンとたたく。棒^{ぼう}を片手^{かたて}にそっと戸^とを開^あけると、本人^{ほんにん}だったという。半年^{はんねん}ぶりに帰^{かえ}りついた我^わが家^やでこんな出迎^{でむか}えをうけるとは、やじべいさん、さぞ驚^{おど}いたことだろう。

ムジナのはなしをもう一つ。

かみさんが、みそ汁^{みそじゆ}に団子^{だんご}を入^いれたおつけだんごをいろりにかけて、奥^{おく}で赤^{あか}ん坊^{ぼう}を寝^ねかせつけていた。そこへ主人^{しゅじん}が帰^{かえ}ってきたので、

「お膳^{ぜん}の用意^{ようい}もしいたし、先^{さき}に食^たべておくんはい。」

と、奥^{おく}から声^{こゑ}をかけた。

「ほんなら先^{さき}に食^たべるぞ。」

と、いって、食^{しよく}事^じをして、また出^でかけていった。

すると間^まもなく、

「今^{いま}帰^{かえ}った。」とまた玄関^{げんかん}で声^{こゑ}がする。

「なにおどけたこといいなはるんや。今^{いま}食^たべて出^でか

けなはったばかりやが。」と、かみさん。

「なに云^いうんじゃ。今^{いま}やっど帰^{かえ}ってきたと云^いうんじゃ。」

というので、奥^{おく}から出^でてみると、まぎれもない主人^{しゅじん}であった。

そこでいろりを見ると、いろりぶちに汁^{じゆ}の菜^なっ葉^ばがなすりつけてあったり、灰^{はい}のなかにこぼれていたけれど、だんごは一つも残^{のこ}っていなかったそうな。

